

主題

改善が必要な個浴槽の活用に取り組んで

副題

個浴槽の導入をきっかけにしたチームワークのひろがりについて

限られた環境での改善

チームワークでの成果

研究期間

12ヶ月

事業所

養護老人ホーム 大森老人ホーム

発表者：福原 見奈（ふくはら みな）

アドバイザー：

共同研究者：丸山浩史 堀 亜沙美 田村 恵

電 話

03-3762-8851

メール

oomori_sien2kai@dolphin.ocn.ne.jp

FAX

03-3762-8920

URL

http://www6.ocn.ne.jp/~sousei4/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

平成9年に開設した定員130名の全室個室の養護老人ホーム。デイサービスセンター・区立体育館・児童館・都営住宅・区営住宅・シルバーピアがある複合施設の1階から4階までが施設となっている。居室は2階から4階にあり、各階に男性浴室、女性浴室が整備されている。2階、4階には男性浴室と女性浴室の間に、家庭用風呂の個浴槽が整備されている。

《1. 研究前の状況と課題》

自立度の高い養護老人ホームでも、身体状態によって浴槽に入ることができない利用者がいること、利用者全体のADLの低下が今後考えられることから、個浴槽（機械浴）の導入を決断した。導入までに福祉機器展を見学し、多数の浴槽を検討したが、複合施設という複雑な構造であることが影響し、配管工事を施工しても、現在の個浴槽（機械浴）しか設置できない背景があった。

4年間を経て24年4月に工事完了。設置できたことに安心してしまい、いつでも使用できると思うものの、対象者のイメージが湧かないまま活用まで至ってないのが課題であった。

そのような中、ヘルパー対応で入浴している利用者がADLの低下により浴槽に入ることが難しくなっているとの報告があり、介護保険事業所の協力を得ながら、生活相談員が中心となり、個浴槽（機械浴）の使用を具体的に検討し、活用の充実に繋げていくことが具体的な課題となった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

【目標】

●チームで取り組むことで、色々な視点・方法を用いて、大森老人ホームにおける入浴のあり方について検討・実践を行い、一定期間で成果をだすこと。

【期待する成果・目的】

●ヘルパー入浴の利用者が使用したい時には、すぐ使用できる環境をつくり、今後の個浴槽の活用に繋げること。

●入浴に関しての広い意味での問題を、チームで考えることで、潜在的なニーズを掘り起こし、現在の状況の中で何らかの結果を出し、次の目標や課題を明確にできること。

《3. 具体的な取り組みの内容》

①今後、個浴槽を提供したい利用者に協力してもらい入浴を実施、安心・安全に入浴する為には、いくつかの改善が必要ということが判明。限られた環境で手すりや福祉用具の導入を提案した。

②個浴槽をヘルパー浴に導入できるか、介護保険事業所と生活相談員との懇談会で、個浴槽の使用について提案し意見を求め進めていった。また、改修の経過を事業所に報告し、使用開始時期について知らせた。また、個浴槽を使用するためには、脱衣室の使用が不可欠であったため、ヘルパー浴の提供場所を一部調整し確保した。

③入浴に関するアンケートを他の養護老人ホームに実施、他の施設の課題・取り組みを調査した。

④同じ個浴槽を取り入れている施設を見学し、取り巻く環境等について、情報収集を行った。

《4. 取り組みの結果と考察》

①5か月間で3回の改修を行った結果、ヘルパー浴で利用することができる状況まで整った。また、ホーム職員もADLが低下した利用者、病院から一時外泊をした利用者に使用することができた。しかし、小柄な人には手すりがあっても、段差に不安を感じることも判明した。

②浴室の改善経過を発信したことで、事業所から提供したい利用者について提案があった。脱衣室を確保したことで、利用者の状態に合わせ急に使用してみることもできた。しかし、機械的な部分になじめず、利用者の満足を得られず継続利用に繋がらないケースもあった。また、事業所からは段差解消をしなければ、提供の幅が広がらないのではないかとの意見もあった。現在は1名のみ定期的に利用している状況である。

③他施設も入浴に関する問題を抱え、施設に合った改善や工夫を行っていることがわかった。この結果から、残っている既存の個浴槽(家庭風呂)を改良するなど、新しい利用の可能性を発見した。

④他施設で段差のない個浴槽を見学し、段差解消が必要であることを再認識した、改修の重要ポイントが明確になった。

⑤複数の職員が取り組んだことで、過程において目標がぶれたり、どのような利用方法があるか模索が続いたが、色々なことを同時に進めていくことで、結果を早く出すことができた。

《5. まとめ、結論》

●職員の間で個浴槽活用のイメージが見つけに

くかった。今回の取り組みで『どの利用者にも、安心・安全に入浴してもらえる環境をつくる』ことを基本に考えていくことが一番わかりやすい共通理解だと感じた。

●多くの改善が必要な個浴槽に対して、1つずつ取り組むことで整理できより深い課題が見えた。取り組む前より活用の可能性を具体的に持てた。また、職員がイメージする利用者と実際に利用に繋がる利用者像にズレがあった。全利用者へ個浴槽を紹介することで、多様な利用方法(腰痛時)により対象者の幅が広がる可能性を見出した。

●介護サービス事業所を利用している利用者へ個浴槽を取り入れる環境はできたが、継続的利用には段差の解消を行い、より誰でも安全に利用可能な環境にする必要がある。

●取り組む中で、ホームでの入浴や個浴槽のあり方の可能性を感じた。今後は施設全体で取り組めるように、職員への発信に力を入れていく必要がある。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

発表にあたり、本法人の個人情報保護規定に基づき、不特定多数の第三者に個人が特定されるような情報として公開しないことを説明している。

《8. 提案と発信》

利用者のニーズは幅広く、今後の養護老人ホームのあり方によってもニーズは変化してしまう。取り入れた浴槽をはじめ、今まであった備品など『活用できなくなった』とすぐに判断するのではなく、色々な視点から情報収集することで、違う使用方法を提案していくこともできる。複数の職員で課題に取り組むことは、目的がぶれたり、意見をまとめることに時間を要する場合がある。しかし、目標内容を明確にし、共有することができれば、異なる視点をもった職員が集まることや、同時に取り組めることで一人では生み出せないシナジー効果が得られることを確信した。

【メモ欄】